

「支える側が 支えられるとき」

～認知症の母が教えてくれたこと～

講師 藤川幸之助氏

講演概要

母は60歳の時アルツハイマー型認知症と診断され、84歳で亡くなりました。認知症を患ってからの24年間の母の心の不安、忘却への恐怖、病気による混乱とそれを支えた家族の心の葛藤を通して、認知症という病気や介護について、詩の朗読を交えてお話しします。母の介護の日々を振り返ると、母を支えていたと思ってきた私が、実は母に精神的に支えられ、育てられていたと深く感じるのです。

日時 令和8年11月14日(土)
13時30分～15時30分
開場：13時00分

会場 諏訪市総合福祉センター
湯小路いきいき元気館
3階交流ひろば

参加費無料・申込不要 定員 180 名
満席の場合は入場をお断りすることがあります。

問合せ 諏訪市地域医療介護連携推進センター
(ライフドアすわ)
電話：0266-78-0477
Mail：info@lifedoor-suwa.jp

詩人・児童文学作家

藤川幸之助氏

■日本児童文学者協会会員。

■1962年生。長崎大学大学院教育学研究科修了。

■小学校の教師を経て、現在は認知症の母親の介護の経験をもとに、命や認知症を題材にした作品を作り続けている。また、認知症への理解を深めるため全国各地で講演活動を行い、詩の朗読を交えた講演は好評を博し講演回数は500回を超える。作品や活動は、「天声人語」などの多くの新聞やNHKハートネットTVなどのメディアでも取り上げられている。

提供・長崎新聞社

扉(とびら)

藤川 幸之助

認知症の母を

老人ホームに入れた。

認知症の老人たちの中で

静かに座って私を見つめる母が

涙の向こう側にぼんやり見えた。

私が帰ろうとすると

何も分かるはずもない母が

私の手をぎゅっとつかんだ。

そしてどこまでもどこまでも

私の後をついてきた。

*

私がホームから帰ってしまうと

私が出ていった重い扉の前に

母はびったりとくっついて

ずっとその扉を見つめているんだと聞いた。

それでも

母を老人ホームに入れたまま

私は帰る。

母にとっては重い重い扉を

私はひょいと開けて

また今日も帰る。

『満月の夜、母を施設に置いて』(中央法規)